
恋姫†無双 見上げる月

回覧板(元godaccel)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫＋無双 見上げる月

【Nコード】

N3947S

【作者名】

回覧板（元godaccele）

【あらすじ】

ある日一刀は三国志の世界へ、しかしそこにいる将は女性ばかりだった！？***とたくルートです。女性オリキャラが何人も登場します。不定期更新ですが、かならず水曜日に更新します。

第〇一話 おりてきちゃった! (前書き)

何かあれば報告してください。

感想、批評も楽しみにしています。

第〇一話 おりてきちゃった!

華琳のもとに二つの知らせが舞い込んできた。

「そう……流石は飛將軍と言ったところかしら」

一つはそう、呂布が現在盛り上がる黄巾党の雑兵一万を一人で撃退したというものだ。

「彼女なら後二万はいけたでしょうけど、それほど敵も疲弊しているってことかしらね」

そんな分析をして、次に入ってきた方を考える。

「星がいくつも……か。天の御使いかしら? 春蘭、秋蘭、調べてきなさい」

「〔御意〕」

華琳の命令を受けて春蘭と秋蘭はささっと部屋を出ていった。

季衣と桂花は呼んでいない。これは以前からのことだったので、呼ぶ必要はないと判断して休ませているのだ。

だから華琳は一人部屋にいることになる。自分の部屋に帰ってもいいが、その前に笑いが漏れてしまいそうだったので、先に笑っておく。

「さあ、天の御使いとやらは私の覇道礎になってくれるのかしら?」

ふふふ、と声に出したら、今度は引き締める。

天の御使いとやらが、敵になるか味方になるか、それは分からない。

だがもし敵になるなら、それは天が華琳を……いや、曹孟徳と曹魏の覇道を妨げること。

つまりそれを超えれば、

「曹魏は誰にも止められない」

やりがいはある。

負ける気はさらさらない。
向かってくるものはこれ全て敵とする。

華琳は一頻りの思考を終わらせると、立ち上がり、自分の部屋へと向かうのだった。



「戦いはまだかね」

黄巾を頭に巻き付け、身丈以上の巨大な鉄の棍棒を横の地面に突き刺している女性は、“聞かされる歌をどうともせず”外れで一人のんびりと杯を傾けていた。

杯に浮かぶ満月と、一緒に煽った酒は既に樽三つに及ぶが、一向に酔った気配は見せていない。

「いやしかし、どこだか分からない世界に来たと思えばいきなり強者に出会えたし、酒もこうして確保できた。充実しすぎだね」

そんなことをいいながらも、杯の酒は減っていく。

満月を一気飲みした女性は僅かにトロンとした目をした。思い出したのだ、昨日出会った天衣無縫の如き強者との戦いを。強者が巨大な戟で一振りすれば、人が宙を舞い、地面が砂塵を巻き上げる。ただ一人で万を越す相手に臆することなく立ち向かう姿はまさに鬼人と呼ぶに相応しい。そして、そんな強者を目の前にして震え立たずして武人を名乗れようか。女性は当然鉄の棍棒を振り回して立ち向かった。

結果は負けだ。しかし、黄巾という部隊を逃がし、尚且つこうして美味しい酒を飲めるのだから、運が良いと女性は思う。

「次は負けないよ」

来たばかりで混乱していたとは言え負けは負け、しかし生き残っ

た以上次がある。故に女性は杯に酒を酌み、頭から浴びる。

「この前田慶次が必ずあんたを負かしてやる！ 覚悟しときなよ！」
杯に月を乗せるように翳す。

次は必ず決着をつける。次こそ正々堂々とした戦いをするために。

「あ、また酒がなくなったか。仕方ない。おーい、テンホー！ 酒がなくなった！」

「またあ！？ もう勘弁してえ！」

こういうのも悪くない。

しかし、いつまで続くのかね、こんな戦いが。

慶次は一人、濡れた紅い長髪を後ろの高い位置に結ぶ。

さて、次はどこにいけないんだい？



「ぐへっ！」

「へ？ ここどこだ？」

見知らぬ景色に北郷一刀は咄然とする。さっきまでは自分の部屋にいて、及川と一緒に遊びに行く用意をしていて、いざ廊下に出ようとしたら何かにぶつかって、今にいたる。

痛いので夢ではないだろう。

「のけ、バカ！ バカァ！ うわあああん！」

北郷は周りを見て分かることは一つ。ここは日本じゃないということ。俄かに信じがたいが、ここは日本じゃないと認識するくらいだ。

じゃあどこだここ？ 北郷は首を捻った。

「ばあああかああわわわん！」

手を付いて立ち上がろうとするとふにやっと何やら柔らかいものを潰すような感覚。見てみると自分の下には女の子がいた……巨乳

の。

「うわああああ!？」

北郷はずざっと飛び退き、泣いている女の子と距離を取る。女の子の見る目が妙に刺さる。

いきなりだがやってしまったものを仕方がない。北郷はとりあえず謝ってみたが、どうも許す許さないで済む問題じゃないみたいだ。

「……名前、おしえて」

「え? あ、うん。北郷一刀だよ」

「北郷一刀……? どの武士だ?」

「いや、武士じゃないんだけど……」

「武士じゃない……?」

女の子は驚きで泣きそうになっている。慌て何かを言おうとした北郷だが、その前に、ひたりと冷たい何かが首筋に当てられた。見るとそこには巨大な刃が。

「家康殿に何をした」

冷静な口調の裏には隠せないほどの怒りが漏れていて、それだけで北郷は震え上が……りそうになるが、それ以上に女の子の名前が気になった。家康と言えば、北郷の国の歴史では当然出てくる人物だ。

「徳川……家康……?」

「む……? そなたは妾を知っておるのか?」

「何! ではここがどこかも知っているだろう! さあ吐け!」

どうやらその通りみたいだった。しかし……女の子?

家康の言葉に反応して北郷に詰め寄る女性を家康は手で止めた。

「忠勝! ダメ!」

「……御意」

「ありがと。あのね、北郷一刀」

「あ、一刀で良いよ」

「じゃあ一刀。どうも妾は知らぬどこに来たようなの。そなたは妾の帰る場所を知らないか?」

「教えてあげたいのはやまやまなんだけど、実は俺もここがどこか分からないんだ。だから教えられない」

正直に話した。

すると制されていた忠勝と呼ばれる女性は目に見えて怒りを露わにする。

「貴様！ 家康殿が下手に出たにも関わらずとぼけるか！ ここで始末してくれる！」

「いやいやいやいや！ 本当に知らないんだって！」

「まだ言うか！」

忠勝が槍を振りかぶる。

待ってと言おうとしたのか、手を伸ばそうとしている家康が可愛いと外れた思考をした北郷は死を覚悟して目を瞑った。

来るべき痛みは――来ない。

「ちよおおおと待ったああああ！」

変わりによく響く声が一刀の耳を通り過ぎたのだった。

第〇二話 旅の始まり

「何奴！」

忠勝の声が良く響く。

しかし、北郷を守った女性は怒った風に返す。

「こんな往來のある場所で血を出そうとしてるやつなんか名乗る名前なんかあらへんわ！ さっさとどっかいきい！ うちの目が届く範囲では血いなんか出させへんで！」

「くっ、このっ！」

「忠勝！ めっ！」

家康の一喝にビクツとしたのは忠勝や北郷、それから割り込んだ女性ばかりではない。往來を歩く人々も、小さい女の子に押される大人の女性という奇異な光景を足を止めて見ていた。

渋々とした調子で下がる忠勝を一瞥もせず、家康は割り込んだ女性を正面に見る。堂々としているが涙目だ。

「ごめんなさい。忠勝も悪気があったわけじゃ……」

「悪気の問題やない。こんなところで血を出そうとしたんが悪いんや」「……う、うわあああん！」

「え！？ いや！ まあ分かればええねん！ だから泣かんといて

！ な！ うちはまだ怒ってないから！」

「う、う、……本当？」

既に二筋の川が目から流れている家康を直視出来ないのか、うつと目をそらす女性は、誤魔化すように手を家康に向けてから北郷の方に向き直った。

包帯で隠された胸に顔を真っ赤にする北郷を余所に、力強い女性は北郷の前にずんと立って呆れたように言う。

「あんたも何したんや？ うちがこんかったら殺されとったんやで？ 度胸があるというか、考えなしというか……」

「え、殺され……」

ここでようやく、北郷の思考が追いついた。そして吐きそうになったが、グッと拳を握り嘔吐をせき止める。こんな場所で血を流すのが良くないのと同時に、こんな場所で吐く訳にはいかないと思っただからだ。

そんな北郷をやれやれと見下ろした女性は適当に北郷を立たせた。女性にしては信じられない腕力だ。

「うちは張文遠、あんたらの名前は？」

「北郷、一刀です」

「徳川家康」

「本田忠勝だ」

「なんや変な名前が多いなあ。何で喧嘩なんかしてたんや？」

「それはこやつが！」

「忠勝！」

飛び上がるように忠勝が出ようとしたところを、家康は止める。うぐぐと言いながらも引つ込む辺り良い関係を築いているようだ。いろいろと身の危険を感じてさり気なく張遼の影に隠れる北郷。家康が、泣きはらした目のまま、張遼に向かっていう。

「あのね、帰る場所がわからないの……うわああああん！」

「あーあー！ 分かった分かった！ うちが案内したるわ！ どこに行くんや？」

「う、ひっ、うーんとね、あれ？」

「家康様、私達はどこへ帰らねばならないのでしょうか？」

家康と忠勝は首を捻った。確かに帰るべき場所があったはずなのだ。しかしそれがどこかは分からない。思い返せばいろいろなところが分からず、まるで誰かが意図的に記憶に封をしているようだった。

家康と忠勝の雰囲気気付いたのか、張遼はいぶしかな面持ちになって北郷の方へと向く。

「この二人どないしたんや？」

「さあ……俺も混乱中だしね」

「まあええわ。行くとこ思い出すまでうちと一緒に行動するか？」
それは助かる、と北郷は安心し、家康も頷きで賛同するのだが、
ただ一人忠勝だけはそれに反対した。

「家康殿を誰かの下になど、我慢なりません！　ましてやこのような遊女の下になど！」

「どうやら主君を誰かに付かせることに反対のようだ。」

「ちょい待ちい。うちが遊女やって？」

若干……いや、かなり声音を低くした張遼が槍の穂先を忠勝に向けた。明確に漏れ出す感情、それは殺意。それを感じて忠勝は家康を下がらせる。相手の力量を見てのことだ。忠勝も槍を張遼に向ける。一触即発の空気に通行人も地面に縛り付けられて動けなくなる。

「いや、ここでやらなくても……」

今まさに動こうとした二人すら縫い付ける気の抜けた声を通り抜けた。声の主は頭をぽりぽりとかく北郷だった。

張遼と忠勝の目が北郷を射抜き、射抜かれた北郷はひいと竦む。

「いやあのね！　血出すなって言ったの張遼さんだし！　それに出会っていきなり喧嘩なんて……」

ジィツと見られる北郷はあははと乾いた笑いを浮かべながら、これからどうなってしまうのかを考えて走馬灯を見ていたが、予想に反して痛みはこない。

興を削がれたとでも言うように張遼と忠勝は長いため息を吐く。

それから槍を引っ込めた。

「あんだ……カズトやったか？　強いんか弱いんかよう分からへんな」

「同感だ、こんな情けない男は見ることがない！」

「ぐはっ！」

一刀は精神的に大ダメージを受けた、じゃなくて！

「えっと、俺もついて行っていないかな？　このまま一人でいるのも寂しいし……」

「ええよ」

「よろしく、一刀」

「うぐぐ、家康殿が良いと仰るなら……ただし！ 家康殿に手を出してみろ！ その命、我が槍蜻蛉切で一突きに葬ってやる！」

「よ、よろしく」

忠勝が鬼のような形相で睨んでくるので、またまた北郷は張遼の後ろに隠れる。

かくして、四人の旅ははじまるのだった。



そのまま、一行は張遼に連れられて町から町を繋ぐ道をひたすら歩いていた。

そう、歩いていたのだ。

「忠勝」

一番始めに音を上げたのは家康だった。地面にぺたりと座って上目遣いに忠勝の名前を呼ぶ。反応した忠勝は家康の前まで行き、しやがんで背を向けた。抱っこするようだ。

遠慮なく飛びついた家康。忠勝は槍で家康の尻を引っ掛けずり落ちないようにする。

それを羨ましそうに見ていたら、横からにんまりと顔中でイタズラを思いついたと表現している張遼が視界に入ってきた。

「カズトも疲れてるんと違うか？ うちがおんぶしたるよ♪」

「いや、いい！ 恥ずかしいから！」

「えー、うちにおぶられるのがいやなんか？」

「ちよつとはおぶられ……、はっ！ ダメ！」

甘い誘惑に、もっとといえば抱っこされるために回す腕が手前の柔らかなような胸に触れられるという誘惑に、誘われそうになったが、寸でのところで回避。男の面子は保てたことだろう。

気を取り直して歩いていると遠目に黄色のはちまきをした赤髪ポニーテールの女が歩いてくるのが見えた。張遼が止まり、忠勝もつられて止まり、北郷は背負われている家康の背中にダイブして止まった。

前からくる赤髪の女は変わらず歩いてくる。手に持った身丈の倍はあるのかという鉄の棍棒が印象的だ。

そんな呑気なことを考えていた矢先、四人の体をぞわりと何かが舐めた。北郷は全身硬直してしまった。

それが赤髪の女が放っている殺気だと気付くには時間が必要だった。

忠勝は家康を北郷に優しく押し付け、槍を構えた。隣では既に張遼も構えを取っている。

北郷は気力を振り絞って足を引きずるようにして殺気を放つ三人から距離を取っていく。しかしある程度離れると、家康が踏ん張ってしまいがれなくなったので、そこで止まる。

赤髪の女は接触まで残り十歩くらいのところで立ち止まった。

「この辺に呂布奉先って強者がいるはずなんだけど、あんた達知らない？」

「生憎天下の飛將軍様を見たら忘れへんわ」

「そうか、ならそれはいいか」

ならば、と赤髪の女は身丈の倍の棍棒を振り回してから地面に突き立てる。

「じゃあこの前田慶次とあんた達、どっちが強いのかね？」

それが合図だった。

まるで風のように十歩の距離を詰めた慶次の棍棒が、張遼と忠勝、二人の体を舞い上がらせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3947s/>

恋姫†無双 見上げる月

2011年4月20日00時13分発行